チュプキサロン 記録

Vol.6

2023 年 11 月 8 日(水) 14:00-16:30 @シネマ・チュプキ・タバタ シアター　参加者：10 名

テーマ　ユニバーサルシアターの未来 ①

発表者　平塚 千穂子さん（シネマ・チュプキ・タバタ代表）

参加者へのメッセージ

“サロンではこれまで、「映画とは何か？」からスタートし、「映画館と人」「映画館とまち」について対話を深め、映画館という場の意義について繰り返し共有してきました。ここから最終回までの 2 回は、場の未来について考えていきたいと思います。

前回のサロンで、平塚さんから「最近迷走している」という言葉が出たことをきっかけに、今回は、場が直面している現実問題を扱います。常設のユニバーサルシアターを維持していく難しさや厳しさは、オープンから 7 年経った今もまだ、チュプキが日本唯一のユニバーサルシアターであることが物語っています。今回は、平塚さんから、音声ガイドの制作体制、売上に左右されながらの作品選定、コミュニティづくりや後進の育成などの＋αへ向けるエネルギーの創出など、チュプキが抱える問題についてうかがいます。また、スタッフの柴田笙さんから、働き方についてコメントをいただきます。

ここで交わした会話が、第二、第三のチュプキが生まれるきっかけになり、回り回って、あらゆる人たちが共に心地よく生きる社会の実現につながることを願っています。”

チュプキサロンでは、アクセシビリティやまちづくりなど、さまざまな切り口からユニバーサルシアターの「場の意義」について対話を重ねてきました。その中で毎回挙がる「場が抱える課題」を正面から扱うべく、シネマ・チュプキ・タバタ代表の平塚千穂子さんとスタッフの柴田笙さんがプレゼンターとなり、チュプキの経営面の課題を具体的な数値も示しながら説明しました。後半は参加者も交えて、何がその課題を作っているのか、日本でさらに常設のユニバーサルシアターが生まれてくるためには何が必要か等について考えました。

音声ガイド制作者、ラジオ構成作家、キュレーター、ミニシアターや上映スペースの経営者ら、いつもの顔ぶれが揃い、アイスブレイクでは、お題『秋の美味しい食べ物』を自己紹介と共に出し合って、和やかに始まりました。

映画チケット収入だけでは経営が成り立たない産業構造の中で、全上映作品にバリアフリー字幕と音声ガイドをつけるユニバーサルシアターは、より厳しい状況下にあります。音声ガイド制作への公的助成の不足や、社会的認知の低さも背景として挙がりました。効率化の論理だけに絡め取られず、どのように文化芸術を守るのか。担い手同士でつながりながら、大きな構造に対して諦めずに行動していこうという声もあり、各々が当事者としてこの問題提起を切実に受け止めていました。レポートでは抜粋、編集してお伝えします。

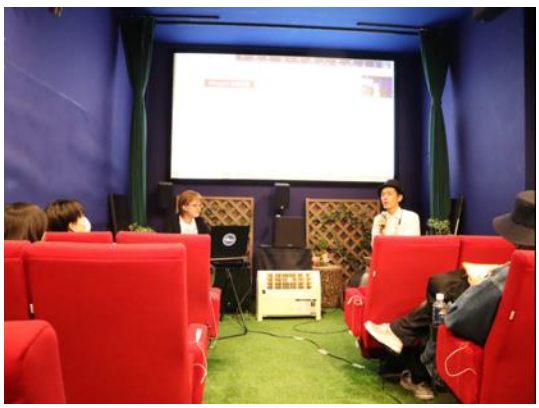
（構成・文：舟之川）

プロジェクト運営メンバー　平塚千穂子（シネマ・チュプキ・タバタ代表）/ 石井健介（ブラインド・コミュニケーター）
舟之川聖子（コーディネーター）/ 吉川真以（コーディネーター）

TURN LAND プログラム　主催：東京都，公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京，一般社団法人 谷中のおかって

石井：今日は、このサロンの舞台である、日本で唯一のユニバーサルシアター、シネマ・チュプキ・タバタをきっかけに、これからのユニバーサルシアターを考えていきます。では平塚さん、お願いします。

平塚：前回のサロンのときにわたしがふと「迷走」という言葉を発したのを皆さんが聞き逃さずに（笑）、心配してくださったり、「ここまでサロンを続けてきたけれど、そういえばチュプキのことをまだそんなに知らないね」というお声もいただきました。そこで今日はわたしからお話させていただきます。目的は、「この場を借りて、チュプキをどうするかを考えてもらう」のではなく、「ユニバーサルシアターをどんどん広げていくために」ということで、まずはチュプキの現状や課題を共有して、きっかけにしたいということです。ではまず、チュプキの事業から説明していきます。



平塚（左）と石井（右）

チュプキの事業

平塚：チュプキの核は**劇場の運営**です。通常の映画上映で、集客のために舞台挨拶をやったり、物販をやったり、宣伝をします。チュプキのことを知っていただくための Web ラジオ配信をしたり、サポーター会員に上映スケジュールや舞台挨拶などの情報をお伝えするメールマガジンを送ったり、ホームページや予約サイトの運営もしています。このシアターを有料で貸し出す**シアターレンタル**のサービスも行っています。

劇場運営に関わる**鑑賞サポート**としては、主に音声ガイドとバリアフリー字幕の制作をしています。現在日本で公開される劇場公開映画の 1.5 割強が、映画会社が自社で字幕や音声ガイドを作ってバリアフリー対応させている作品ですが、そのほとんどが日本映画の大きな会社（東宝、松竹、東映）が配給していている作品です。その他のいわゆるインディーズ系やアート系の作品は、ほぼバリアフリー対応していないので、当館で上映する場合には、当館が制作費を持ち出しで作らせてくださいという形で制作の許可をいただいて、資料を提供してもらって作っているという現状があります。

鑑賞サポートとしては他にも、視覚障害者のお客様が一人でいらっしゃる際に、ご希望に応じて、駅へのお迎えやお見送りもしています。聴覚障害の方でご希望があれば、舞台挨拶のときの手話通訳者の派遣依頼を行います。UD トーク（音声を文字表示するアプリ）のサポートもしています。ただ、UD トークは誤変換が多いので、修正しながら表示させる作業をする人が必要になります。土日などの来場者が多い日にこれらのサポートが入ると、いつもよりもプラス 1 人～2 人のスタッフが必要になりますので、他の劇場さんよりもスタッフ配備を厚めにしておく必要はあります。

劇場以外の事業としては、外部から音声ガイドや字幕の制作依頼を受ける**バリアフリー制作**もしています。たとえば、行政主催の映画上映会のバリアフリー化をするのに、一から音声ガイドの制作をしてほしいとか。音声ガイドはあるけれども、その上映会を開催するときに音声ガイドを聞きたい方だけが聞けるように、FM ラジオのイヤホンで聞けるようにしてほしいという場合に、機器の貸し出しやオペレーターの派遣をする**上映会協力**を行っています。「イベントでユニバーサル上映をやってみたいけれど、やり方がわからない」という個人や団体にコンサルティングをしたり、ユニバーサル上映ができる映画を紹介する、配給仲介やコーディネートのようなこともしています。

2021 年にチュプキで『こころの通訳者たち』というドキュメンタリー映画を製作しまして、その**配給業務**が昨年から加わりました。劇場配給はほとんど終わって、今は自主上映に対応しています。上映会をしたい個人や団体に向けて、素材や宣材を送っています。

他には、わたし（平塚）が音声ガイド制作講座の**講師**として呼ばれたり、講演会に招かれたり、ここのシアターで見えない人、聞こえない人がどうやって映画を楽しむのかを体験するワークショップなどを企業研修などの形でご依頼を受けてやっています。

こういった業務を、劇場運営に関しては、わたし、社員 3 人、アルバイト 2 人で分業しています。音声ガイド制作は劇場経営とは違うチームで動いていて、City Lights（2001 年設立のバリアフリー映画鑑賞推進団体）の頃から関わってくれている方や、チュプキ主催の講習会の過去の修了生がチームで動いています。バリアフリー字幕は、学校で専門的に学んだ方や、字幕制作をお仕事にしている個人やグループにお願いしています。外国映画の音声ガイドは、吹替版があればそれに音声ガイドをつけ、吹替版がない場合は字幕の朗読を、また別のグループにお願いして制作しています。ここの 2 階のスタジオで収録や制作を全て行っています。制作には社員も関わることもあるのですが、やはり時間も労力もかかるので、劇場運営と兼ねてやるのは難しいです。こんな感じの体制ですが、勤務時間が長くなってしまうこともあります。

収入と支出

お金の面はどうなっているかというと、資料を見ていただくとわかる通り、配給会社からの版権の仕入れ（映画上映料）だけで、チケット収入の半分かそれ以上になっています。チケット売上だけでは、本当に利益が出ない業種なんです。契約としては、チケット売上に対する歩率（劇場の取り分の割合）を決める契約がほとんどです。上映会などでは、フラット契約といって、1 回の上映で 5 万円や 10 万円などの契約になります。劇場であってもフラット契約でやらなくてはいけない作品もあります。

支出に関して特に大きかったのは、昨年は DCP という、本体だけで 600 万ぐらいする映写機材を導入したことです。これはクラウドファンディングを実施して、みなさまからサポートしていただき、なんとか導入できました。今はもう DCP がないと大手や中堅の配給会社と上映契約すらできないので、メジャーなヒット作を興行するには、導入するしかないのですが、機材のアップデートが 10 年ごとに必要で、それが多くの劇場の経営を圧迫しています。その他、家賃や給与、交通費や通信費など細々したいわゆる販管費（販売費、一般管理費用）もかかってきます。

売上をどう上げるか、収入をどう増やしていくかを考えたときに、利幅が良いのは物販、シアターレンタル、講習会や講演、そして外注のバリアフリー制作です。チケット売上に関しては、劇的に伸ばすのは難しいです。ここのシアターが 20 席という上限もありますし、その作品にお客さんが入るかどうかは、タイミングによっても全然変わってきます。じゃあ音声ガイド制作で売上を伸ばそうとなると、たくさん作るということになります。ただ、スケジュールの点からいうと、現状ですでに理想の半分ぐらいのスケジュールで回さざるを得ない状況なので、これ以上受注するためには制作体制を整えないと難しい。

制作のざっくりした流れとしては、まずディスクライバーさんが音声ガイドの台本原稿を書きます。その後、視覚障害者のモニターさんと、関われる場合には監督にも参加してもらって、クオリティチェックをします。そこでは、台本原稿で気になる部分の意見を聞いて、どう直していくかを丸一日かけて検討します。その後、修正したものを仕上げて、ナレーターさんに渡して収録、細かい編集ののち完成、となります。

石井：音声ガイドの制作費って 1 本いくらぐらいなんですか。

平塚：文化庁の映画制作助成で「芸術文化振興費補助金」というものがありまして、その審査に通った作品はオプションでバリアフリー制作費も出ます。その金額が一つの基準になるのと、その他、業界の相場として「字幕と音声ガイドのセットでいくら」というだいたいの基準があります。あとはご相談しながら。

石井：UDCast や HELLO! MOVIE などの鑑賞サポートアプリに登録する金額もあるんですよね。

平塚：はい。受注金額からその費用を差し引くと、制作費がかなり低く抑えられてしまうこともあります。

やりがいと働き方

平塚：ここまで経営者としてお話してきましたが、スタッフが作品選定や働き方の点で実際どう思ってるのか、柴田くん、お願いします。

石井：最初に、僕から柴田くんに聞きたいことがあって。なぜチュプキで働きたいと思ったんですか。

柴田：もともと学生時代からずっと映画館をやりたいなと思っておりまして。他の劇場でアルバイトもしていたんですけど、もうちょっと内部事情を経験してみたいなと思って、コロナ明けくらいにチュプキに、ボ

ランティアでもいいので参加させてくださいとお願いしました。最初ここに映画を観に来たときに、他の劇場とはちょっと違う雰囲気を感じまして。ちゃんと映画を届けられてるなぁと。この狭さや、お客さん一人ひとりとのやり取りや、会話は交わさなくとも生まれるグルーヴ感に新鮮さを感じて、気になりまして。メールしたら、「じゃ、来て〜」と（笑）。

石井：平塚さんっぽい（笑）。その上で今、柴田くんが担っているお仕事について教えてください。

柴田：お店に立つ、音響調整など日々の劇場運営。それから音声ガイド制作ですね。最近では『NO 選挙、NO ライフ』を担当しました。ガイド制作は、自分がすごくやりたいと言い続けて、じゃあ、やってみなよと言っていただいて。『水俣曼荼羅』という 6 時間超のドキュメンタリーのときは、絶対自分がやりたいと駄々をこねて（笑）やらせてもらいました。最近は作品選定にも関わらせていただいております。

石井：作品選定における悩みがあるとか。

柴田：まず、うちだけに限らず、やっぱり映画館離れがすごく進んでいるとは感じています。その上で、ミニシアターという劇場形態で、どのような映画をまちの人に届けていけばいいのかということに悩みますね。アート系のような少し尖った映画をやることこそがミニシアターの色なのか。かといって、まちの人、小さいお子様からシニアの方まで、幅広い人に愛される映画も届けたいし……。あとは北区が特殊なのが、シネコンすらないんですよね。その中で、うちが夏休みに新海誠さんの映画をやったらたくさん人が来てくれて、それはすごく嬉しかったんですけど、そういう大作映画もうちが担わなければならないのだろうかと思うところもあります。いやそれとも、地域の人に映画を届ける使命をもうちょっと意識しないといけないのかもしれないとか……せめぎ合っています。バリアフリーの点では、まだまだミニシアターでかかるような映画には音声ガイドや字幕がついていないことが多くて、特に外国映画はやりにくい。制作の手間もコストも時間もかかる。そうすると自ずと届けられない映画が出てくる。うちで上映しないことによって、その映画が届かない人を出してしまうんだな……とか。

石井：チュプキができたばかりの頃は、何も考えずにいろんなことをやっていたという話を聞きましたが。

平塚：最初の頃は、自分が観ていいと思ったものしか選んでなくて、全然お客さんが入らなかったり。そういうことを経験していくうちに、やっぱり入る作品っていうのを意識するようになっちゃいましたね。回転数も、1 日 5 回ぐらい上映できた方がいいなとか。チュプキを作る前に、「アートスペース・チュプキ」というところで上映活動をしていたときは、インターバルを贅沢に 1 時間以上とって、毎回感想シェア会をやって、1 日 2 回しか上映しないとか（笑）。でもそれはそれは豊かで充実した、とてもかけがえのない時間でした。今はもうそうは言っていられない。たくさんお客さんに来ていただいてうれしいんですけど、満席続きの入れ替えだと、もう捌くようなことも起きてますし。昔は映画の上映以外にも、ショートフィルムコンペという映画祭をして、クリエイターを育てることをやったりしました。そういうチュプキ発信でのイベント企画が、今はそこまでやれていない。忙しいと従業員も疲れてきちゃったりもするし、発想が枯渇する。思い切ったことがしにくくなっていく。バリアフリー制作も、やっぱり早いサイクルで回していかないといけないから、学んだばかりの人や初めての人を巻き込んでいきにくくなってしまうから、それも問題だし。まぁいろんな経験を積んでいって、ちょっとしぼんじゃってる部分もありますね。

石井：僕もチュプキにはちょこちょこ来てるので、皆さんがどれだけ忙しくしてるのか、わかるんですが。柴田くん、働き方や自分の稼働時間について思うところをお聞かせください。

柴田：まず日々の劇場運営では、ユニバーサルシアターなので、平塚さんの話にもあったように、舞台挨拶時の UD トーク対応や、駅までのお迎えやお見送り、その他イレギュラーやプラスアルファの対応は出ます。そこにガイド制作が入ると、やはり稼働時間は長くなりがちです。ただ、こういう働き方がユニバーサルシアターのモデルにされてしまうとよくない。チュプキ内でも、人が入れ替わって、新しく来た人がこの働き方で仕事せざるを得ない状況では、長い目で見て続いていかないなとは思えてしまいます。こういう状況は、ちょっと言い過ぎるかもしれませんが、やりがい搾取みたいなことでもあるのかなと思いますし。

石井：外から見ていて、いわゆる抑圧的な雰囲気は、チュプキからは感じないんですよね。お互いにフォローし合って、尊重しながらやっていると思う。でもやっぱりこれではちょっとサステナブルじゃないなっていうのがみなさんの中にあって。でも、現状ではまだそこに対する明確な解決策を見い出せていないという感じでしょうか。

柴田：そうですね。やりたいからやっているという強みもあると思うんですけど、まぁ疲れちゃうし、パフォーマンスも落ちちゃうし、そこの兼ね合いが難しいですね。ただ、これは決してうちだけの問題じゃなくて、映画界や、そもそも日本社会の働き方の問題だったりもするのかなとも思います。いろんな人がちゃんと休みが取れて、その余暇で映画を観るようになれば、うちも経営面でもう少し楽になるかもしれない。映画界でもっとバリアフリー体制が整ってくれれば、うちだけが手弁当でやることもなくなる。うちも改善しつつ、全体もアップグレードしていけたら、気持ちいいなと思いますね。

石井：そうだよね。だからさっき平塚さんが話してくれたバリアフリー制作の予算が、文化庁の助成金に申請して通ったものだけじゃなくて、全てに対してつくようになれば、それだけ予算を見込めるし、人を増やしてマンパワーで解決できる部分もありますよね。

平塚：音声ガイドや字幕を作るための、小口で申請できる助成金を作ってほしいという提言は、文化庁に出してるんです。もう本当に 30 万、50 万という単位でいいので。あと、舞台挨拶のときの手話通訳もやっぱり“費用”としてかかる。だけどそれは別に当事者が負担するものじゃないじゃないですか。だからそこは出すんだけれども、費用負担がかからないような仕組みを行政の方に考えていただけたら。

石井：それこそ情報保障……来年の 4 月 1 日から施行される改正障害者差別解消法で、事業者の合理的配慮の義務化というのであれば、向こう何年かは公的責任で助成をして、その土台を作ってくれたらいいですよね。平塚さん、柴田さん、いろいろつまびらかにしていただいて、ありがとうございました。

切実さを受け止める

石井：ではここからは、平塚さんの発表を聞いての感想や質問をシェアしていきます。

チュプキの音声ガイド

参加者 a：めちゃくちゃリアルな話で、どの業界も変わらないなと思いながら聞いていました。「やりがい搾取」という言葉にドキッとしました。でも、このチュプキの中で搾取する・される関係があるというよりは、みんなが搾取されている状態だなと思います。相手が何かわからないですけど……だからこれはもう業界全体の問題だなと感じました。わたしも手間のかかる作り方をするタイプで、それは素晴らしいことだと思ってるんですけど、たとえば、チュプキの音声ガイドのクオリティチェックは他よりも圧倒的に長いですよね。3 倍ぐらい時間をかけていると思うんですけど、そういう作り方自体を今後変えていくことはお考えですか。劇場収入を劇的に上げるのは難しいから、音声ガイドのコンテンツ制作で収益を上げていこうとなったとして。

平塚：わたしはそこの面白さこそがお金に変えられない報酬の代わりだと思っていて。そこを合理化して時間で区切って、話が横道に逸れたら戻して……とやっていたら、なんだか得るものが少なくなってしまう。今、制作を担っているのも、「すごく楽しいからやりたい」というタイプの方で、こちらからお願いする場合も、「この人、絶対この映画好きだろうな」と思う作品をやってもらっています。だから、作り出す過程での、視覚障害者のモニターさんや監督とのコミュニケーションは、極力カットしたくないんですよね。

石井：僕はチュプキの他にも音声ガイドのモニターで関わっているところがあるんですけれど、そちらは時間できっちり区切って、淡々と進行していく感じ。チュプキのクオリティチェックは、丸一日かけてやる。「今日これ終わんのかな」とよく思う（笑）。でも、だからこそ、監督と仲良くなれたり、映画に込めた思いや裏話を聞けたり、他ではない経験ができる。そこはチュプキの良さだと思います。すごく面白いから、時給換算にしたらすごく低いじゃんという考え方には全くならないんですよね。

参加者 b：音声ガイド業界の中で、他の団体さんがやるガイドの商品と比べて、チュプキが作る商品には、どんな特徴があると思いますか。

平塚：製品としてのクオリティよりも熱量を大事にするので、たとえば、プロのナレーターさんにシャキッと明瞭に読んでもらうことよりも、どちらかというと、作った人の思いが乗るようなガイドを大切にしています。それを、監督や製作の方々たちも、「それがなんかいいよね」「その作品に合っていればいい」というふうに考えてくださる。業界には、音声ガイドのルールのようなものがあるんですけれど、チュプキはかなり型破りな音声ガイドもやっちゃったりしています。もちろん作品に合わせて、作品性を大切にした上で、ですが。そういう作り手（ディスクライバー）の

個性を出すような音声ガイドを面白がって、楽しみにしてくださってるお客様はいますね。

参加者 b：先ほど、時間がない中で制作せざるを得ないときがあるというお話がありましたが、もう少し手間をかける場合との違いは何ですか。

平塚：やっぱり時間をかけて複数の目でチェックしたり、映画制作者の目が入ったほうがいいですね。特にそれを一番活用する視覚障害者の人が聞きやすいものかどうかのチェックは、あった方が絶対いいです。最低限で作ってしまうと、どうしても独りよがりな解釈をしていたり、間違った表現をしている場合もあるので、台本上での精査はしたほうがいい。具体的には、語順とか。主語が前の方が聞きやすいところだったのに、全部主語が後になっちゃっていたなとか、すみません、パッといい例が出せないんですが。

他の参加者に問いを投げかける参加者

参加者 c：現役でミニシアターの経営をされている方々は、先ほどからの話をどのように聞かれたのか、聞いてみたいです。

参加者 d：もう切実な思いで拝見しました。興行収入だけではそもそも成り立たない、販管費も含めると赤字になってしまうというのは、興行が抱える構造的な問題だとわたしも思います。20 席という席数では、そもそもキャパの問題で成り立たないという切実さもよくわかります。平塚さんがすごいのは、上映作品全てに音声ガイドと字幕をつけるという、膨大な業務をこなしているというところ。そこが通常の劇場にはないので、スリム化できる部分はありますし、飲食など他の売り上げをどう作っていくかとか、考え方がもう少しシンプルなのかなとは思います。

参加者 e：僕のところは、すごく言いづらいんですけれど、自社の建物なので、まず家賃がかからない。これがもう圧倒的に楽をしちゃっている。あとは、常設の興行館ではないということと、週末だけ家族経営でやっているので、人件費もほとんどかからない。駅から遠いので料金設定も低めにしていて、仮に席が埋まったとしても収入は数万円。フラット契約だから、どんなに頑張っても黒字にはならない。それは最初からわかっていたので、僕もこれをやるかどうか悩んだ時期がありました。でも、赤字だから失敗というふうにはならないんじゃないかと、お金じゃない気持ちがあったので、やることにしました。失敗や成功の定義はわかりませんけれども。

参加者 f：平塚さんの仕事量が半端ないな、この愛情はすごいなと思って聞いていました。ちょっと働きすぎじゃないですか（笑）。みんな同じ 24 時間、身は一つ。大切なのは、持続可能な経営と僕らの使命、「映画館で映画を見る人を増やす」だと思うんですよね。うちも夕方以降はイベント上映や貸し切り上映をしたりして売り上げを作るんですけれども、やっぱり倒れない程度にやらないといけないと思います。1 人では限界がある。今日のお話を聞いて、あらためて人をつなげる役割を果たす映画館は楽しいなと思いました。でも、やりがいがないことは、やりたくないからね。楽しくやりたい。いいイメージを持ち続けて、情報交換できる場に参加できてよかったです。

映画館は面白い方に行っている

平塚：第 3 回のときにオンラインで参加された杉本さんが、今日は会場にいらっしゃってます。

杉本：兵庫県豊岡市からきました、杉本悠といいます。豊岡映画センターという任意団体に所属して、日々上映会をやっています。正式には地域おこし協力隊の映画部門で、たぶん日本初だと思うんですけど、そこで昨年から活動しています。このサロンの第 3 回で発表された今井さんの映画館設立にも参加しています。豊岡市は日本海側にあって、西の方に行くと鳥取。そこにジグシアターという上映施設があります。経営しているご夫婦が自分たちが好きな映画、ゴダールとか、かなり攻めた映画を毎月上映しています。北の方に行くと、京都の舞鶴市にシネ・グルージャという、これまた面白い映画館があります。普段は飲食業をやっていて、六角形の特殊な建物の真ん中が映画スペースで、周りがカフェという作りで。そういうちょ

っと面白い映画館に囲まれて、豊岡劇場はあります。今、既存の映画館にはない、新しい映画の見方や届け方が増え始めて、お客さんからしても、「ここだったら行ってみたい」と思うような映画館や映画スペースが増えているので、状況は厳しいですけども、僕は希望をちょっと感じている。それが儲かるかどうかは別ですけど、面白い方に行っているとは思うので、考え続けて、動き続けていけば、なにか可能性はあるんじゃないかとは日々感じております。それと、僕はこの夏から Japanese Film Project という映画界の労働実態を調査する団体（ https://jfproject.org/ ）の理事にもなったので、先ほどの働き方の話は、まさに関係あることとしてうかがっていました。

構造を変えるには

参加者 g：映画館がなくなるのは社会的損失であるという意識を持ってない人があまりに多いので、多分こういうふうになってしまっているんですね。もっと言うと、文化芸術が、いわゆる受益者負担だと一般的には考えられているけれど、それは間違っていると思うんです。文化芸術も、教育もそうですが、受益者は未来の人たちであり、未来の社会。この根本の部分をもうちょっと認知させていかないと、こういうものは多分変わらないとずっと思っています。その構造的な部分にあまり目を向けずに、自分だけでひたすら工夫を凝らしてやっていくのも、それはそれで疲弊してしまう。そこは関係性の中で助け合いができるといい。だから今みたいに、いろんな方々が意見交換をすることはすごく重要だと思います。ここから何か新しいアイディアが生まれてくるかもしれない。

参加者 h：僕は今、行政の文化芸術支援の枠組みを使ったり、地方自治体発信で何かできないかと考えています。自治体に働きかけられそうなデータを探して、それを持って話しに行く。すぐには無理だと思いますけれど、そういうことの積み重ねが、蟻の一穴のように、変えるきっかけになる可能性もあるので、やっていきたい。それでもし何か自治体初の小さな枠組みができて、前例がつくれれば、それが他の自治体に波及していくかもしれません。

伝える、広げる

石井：映画関係でない方々も、今日のお話を聞いて思ったことがあれば。

参加者 i：現場のお話を聞くのは大切だと思いました。外からただ見ているのではなくて、現場に行って、聞いて、いろんなことを知って気づくという経験が大切だと。まずはこのような場所があることを広く知ってもらう、来てもらう、そのきっかけを作ることは、わたしの仕事の中でやれるかなと思います。

参加者 j：わたしは個人事業主として美術関係の仕事をしているんですが、本業という保障があるので、多少やりがい搾取的な仕事も個人で受けられる状況です。とはいえ、やはり日本の芸術文化全般で構造的な問題を抱えている。このことについて当事者でない人はいないはずなので、みんなが立ち向かわなくてはいけないと思います。わたしにできる本当に小さいこととしては、こういったサロンの場や、チュプキのような場所に、これから活躍される若い方たちを連れてくることかなと思います。

平塚：皆さん、ありがとうございました。わたしが何を望んでいるかといえば、従業員も、お客さんも、みんなが生き生きと輝いていてほしいということだけなんですよね。そうなっていない現状があるなら、なんとか改善していかなくちゃいけない。あとはやっぱり大きな構造を動かすにはどうしたらいいか、みなさんと考えていきたいです。横のつながりも強めて、諦めずによい方向へ、みんなが楽しく生きられる世界を、映画館から創造していけたらと思います。最近、学校で教える機会もあって、若い世代に自分がやってきたことを伝えたりもしています。そういうことも大事にしていきたいです。

石井：次回も引き続き「ユニバーサルシアターの未来」について考えていきたいと思います。ありがとうございました！

（終）

（構成・文：舟之川聖子）

顔馴染みになった参加者同士。サロン外でのコラボも進む。

チュプキのロビー